

講義録

夢見手との出会い：精神分析の経験

吾 妻 壮

Meeting with the Dreamer: Experience in Psychoanalysis

AGATSUMA Soh

○吾妻 どうも御紹介ありがとうございました。吾妻 壮と申します。今日は、こんなお天気の良い中、こうしてこちらに来ていただいてどうもありがとうございます。

今日のお話は、題名はこのように、「夢見手との出会い：精神分析の経験」というタイトルで話させていただきます。まず精神分析の話を、多分精神分析という言葉についてはもちろん御存じの方が多いと思いますけども、それが何なのかということについて触れながら、フロイトなどについても簡単に御説明しながら、それで夢というものがどのように理解されているのか、それについてフロイトの考えから始めて、少しずつ現代的な考え方に、精神分析の世界での考え方にも触れていきたいと思います。

最初に、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、それこそさまざまな夢は持っていたんですけども、現実生活では医学部を卒業いたしまして、精神医学を専攻して、精神科医という職業につきました。

なぜ、精神分析を専門にすることになっていったのかというと、もともと私は文系の領域にも非常に関心がありまして、実は医学部に行く前に文学部を卒業しているというようなこともありまして、医学部に行くときには既に、何か精神分析とか精神病理とか、そういう、脳の研究ではないことをやりたいなと大体決めていまして、精神科医になるのであれば医学部ということで、医学部に行ったということがありました。

その中で、医学部に行くときはよくわかっていなかった精神医学のこともだんだんよくわかってきて、どうもアメリカがいいらしいと、アメリカのトレーニングというのはなかなかハードで進んでいるらしいということを知って、友人にたきつけられて、それで結局、じゃあアメリカで精神医学と精神分析、両方やってこようというふうな、当時は元気が今よりもあって、余り先のことを考えてなかったんですけども、そんな経緯でアメリカのニューヨークに行きました。アルバート・アインシュタイン医科大学という、これはユダヤ系の医科大学なんですけども、ニューヨークのブロンクスという、

マンハッタンの北で少しラフなところにあるんですけど、そちらのほうに行って、精神医学の基礎のトレーニングを受けました。

アメリカは非常に精神分析というのが昔から盛んで、今でも日本ではちょっと考えられない位に盛んだという事情があって、雰囲気、精神分析を勉強するというのは普通だという感じだったんです。

漠然と精神医学と精神分析の勉強ができればいいなと思っていたんですけども、どうも訓練というのは思っていたよりもかなり時間がかかるものだったんですけども、最初、同じニューヨークのマンハッタンの北のほうにあるコロンビア大学精神分析センターというところで授業を取ったりとか、精神分析を私自身が実際受けたりとかしていました。そのあと、ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所というところがあるんですけど、ここもまたマンハッタンの真ん中のところなんですけども、そこで勉強いたしました。それでも、そのころには精神分析を専門に、中心にしようというのを決めていましたので、どっぷりつかっていたような感じだったんです。

結局9年ほどアメリカにおりまして、日本に戻って、日本の精神科病院及び大学病院での勤務を経て、4年前からこちらの大学でお世話になり、教鞭をとらせていただいているということです。

こちらでは、精神医学というのは、やはりメンタルヘルス関係に関心がある学生さんにとっての基礎の1つになりますので、精神保健福祉士の養成や臨床心理士の養成に携わっております。

私は、国際精神分析協会、IPA という団体があるんですけども、そこから精神分析家の資格をいただいた者です。IPA というのはフロイトが始めた協会なんですけども、もちろんこれだけじゃなくて、精神分析関連の団体は他にもいろいろあるんですけども、IPA はその中でも最も大きな団体と言えるところです。

これは余談ですけども、私がニューヨークで最後にいたウィリアム・アランソン・ホワイト研究所というところは、何か研究所というよりは、ちょっとした家のような建物なんですけども、4階か5階建て位の家みたい

なところで、アッパー・ウエストサイドという地区にあるんですけど、皆さんも御存じのジョン・レノンが残念ながら射殺されたというのは、そこから歩いてすぐ近くのところなんですね。そういう割といろんなポップカルチャーというんですかね、そういうふうな雰囲気、ブロードウェイとかも比較的近いですし、そういうにぎやかな感じのところですよ。

エーリッヒ・フロムという方、名前を聞かれた方、御存じの方も少なくないかと思うんですけども、精神分析家で、このホワイト研究所という精神分析研究所の創立者の一人になっています。

あとは、もう一人、ハリー・スタック・サリヴァンという方、この方は精神科医で、精神分析にも強い関心を持っていた方で、この方も創立者の1人です。

私が学びましたウィリアム・アランソン・ホワイト研究所というのは、フロイトの考えはもちろん大切なんですけども、比較的、フロイト以外の、社会的な影響とか、あるいは実際の対人関係の交流とか、そういうものの影響を取り込もうという、そういう意味で言うと、フロイトに非常に忠実な分析家たちのグループと、昔は議論して、バトルしていたというふうなところでした。もっとも最近では、あまりバトルとか内部紛争みたいなものだけではいけないので、手を組んで、精神分析というものをさらに広げていこうというような動きに変わりつつあります。

私が今回のセミナーについて、こんなことを話しますということで挙げさせていただいた概要をちょっと読んでみます。「精神分析の創始者フロイトは、夢は抑圧された願望を充足するためのものだと考えました」とありますが、この抑圧された願望というのはどういうことなのかということをお説明したいと思います。フロイトは、人間の無意識的世界の謎を解くための夢分析の方法を考えました。この無意識的世界というのは何なのかということについても、ちょっとお話ししたいと思います。

フロイトが亡くなったのは1939年ですね。1856年生まれの方ですけども。ですから、それからもう何十年もたっているわけですね。亡くなってから80

年近くたっているわけですが、その後、夢の精神分析的な理解は変わってきています。また概要からですが、「最近では、夢は生きられていない自己を表現するものだと考えられるようになってきています」とあります。抑圧された願望から生きられていない自己へというふうには、少しシフトがあるということです。どう違うんですかということになるかもしれないんですけども、夢は生きられていない自己を表現するものだと考えられるようになってきています。精神分析を通して、夢見手といかに出会うのか、今日はこのことについてお話をしたいと思います。

この夢見手といかに出会うのかというのは、ちょっとなかなか微妙な表現なんですけども、夢見手というのは、英語で言うと dreamer になります。夢は dream ですね。夢見ることというのは、dreaming になりますね。ですから、夢と出会うんじゃないくて、夢と出会うのはもちろん大切なんですけども、やはり夢見手、dreamer と出会うことがより大切ということなんです。実際の夢分析の場では、もちろん夢見手が目の前にいるわけなので、dreamer とは同じ部屋にいるわけなんですけども、出会うといっても、はい、こういう夢がありましたというふうな、はい、じゃあ後はよろしくというふうな、そういう出会いじゃなくて、その夢の中でしか表現されていないような自分という、そういう dreamer と出会うことが大切であるし、それが夢分析の真骨頂だと、そういうお話なんです。

実は結論を言ってしまったような感じのところがあるんですけども、これで終わりというわけでもないんですけども、大体そういうふうなお話をさせていただきます。

それでは次に、精神分析というものについて簡単に御説明させていただきます。

精神分析の幾つかの仮説と言いますか、前提と言うんでしょうかね、これはそうだろうというふうには前提にしているものがありまして、いろいろあるんですけど、やっぱり一番大切なものは、心的過程には無意識的なものがあるというものです。

すると、無意識というものは、じゃあ本当にあるんですかという話になるかと思います。私は無意識というものは感じたことはないんですけど、という方がいるかもしれないですけども、それはそれで全く正しいことだと思います。なぜならば、無意識というのは、定義上、感じることはできないものなんですね。感じる事ができたら、それは意識になりますので。

ただ、1つイメージとして感じていただいたらいいかもしれないのは、意識というのがあって、そこの辺縁にあるものというふうなものです。それは比較的、無意識に近いんですけど、まだ意識の中に入っているんです。例えば、今朝何を食べたでしょうか、皆さん。そうすると、ぱっと思い出せると思うんですね。それというのは、今、今日食べた、朝食食べた献立を考えていた方は多分、いないか、いてもお一人か、お二人位だと思うんですけども、ほとんどいないと思うんですけども、ただこれは思い出そうと思えば思い出せる。あるいはもっと昔、自分の例えば小学校時代の最初の担任の先生とかになってくると、ちょっと時間がかかるでしょうけど、でも思い出そうと思ったら思い出せて、そのときのいろいろな情緒的な体験というものも含んで思い出されてきたりする。ですから、そうすると、だんだん無意識に近づいていくという、それをどんどんやっていくと、全然感じられないレベルのものに至るといって、そういうふうに段階的なものというふうに考えていただいたら、この無意識というものが比較的わかりやすいのではないかと思います。

逆に言いますと、意識的過程というのは心的全活動の一部にすぎないんだということですね。この、我々がこう思っているというようなことは、ごく一部にすぎないという。

最近では、その無意識的なものと似たようなものとして、非意識という言葉も使われています。無意識というと、どうしても精神分析みたいな話になっちゃうので、科学者の方は、非意識という、意識にあらずという言い方をする場合もあります。例えば自転車の乗り方とかですね。そういう自転車の乗り方、できなかったときと、できるようになったときの違いを説明してくだ

さいと言っても、なかなかできないんですよ。あるいは、何となく非言語的なコミュニケーションとかで何か感じるとか、直感とか、そういうふうなものです。そういうのを表す非意識という言葉があります。

それと、精神分析に特徴的なのは、欲動というものをフロイトが考えて、それが精神の病においては大きな役割を果たしていると考えたということです。精神分析の大きな前提みたいなものです。

ただ、ここはちょっといろいろな賛否両論が、実は精神分析を専門にしている我々の中でもいろいろありまして、別にフロイトが全部正しいわけじゃないんじゃないかということに最近はなっていますけど。

説明いたしますと、このリビドーというのは、フロイトは全く純粋に性的というふうな意味で使っておりましたけども、ただ、フロイトが言う性的というのは非常に広い意味ですし、もうちょっとわかりやすく現代風に行えば、相手と言いますか、対象と言いますか、それに近づいていくような動きのことをリビドーと言って、攻撃性、これはフロイトはもっと複雑に、死の本能という表現もしましたが、リビドーは死の本能に対して生の本能とも呼ばれますが、基本的には相手を求める気持ちと、相手をぶち壊しにしたいという気持ち、それが両極にあって、それで人間の動機づけというものが決まっているのではないかという考えがありました。これは仮説なんです。

また、科学とかとちょっと違うんですけど、臨床的に実際に患者さんを診ていますと、こういう仮説を持って治療にあたるとよく見えてくる場合があります。ただ、フロイトが考えた欲動の他にも、それだけじゃなくて、いろいろなことも人を動かすんだということが論じられるようになって、リビドーとか攻撃性だけじゃないものもあるというふうにも言われていますけども、フロイトは、こういう性的な本能と攻撃性というふうなものが、それをうまくいなせない方が心を病むというふうに考えたわけです。

意識と無意識の境目を考えますと、意識というのは氷山の一角なわけですね。氷山の大部分は海の中にあって、水面に近づくとだんだん意識に近づいているわけですけども、意識というのは水面の上に出ている氷山の一角なん

です。

それで、精神分析の方法というのは、やっぱり水面下の方を何とかしないと、こちらのほうの問題を扱わないとうまくいかないだろうという考え方です。先ほどお話ししました夢分析というのは、やっぱり無意識のほうを見ていくためのとてもいい方法だというふうにフロイトは考えたわけです。

もともとはフロイトは、大体1900年前後に精神分析の方法というものを考えたわけですが、それまでは、いい治療法というのが、ほとんど精神の病に対してはなかったんですね。いろいろな病気に何でなるのか説明できなくて、治療法もなかったわけです。

実はギリシャの時代には、もうちょっと科学的な思考が盛んで、例えば黒胆汁という液があって、それが鬱病の原因になるとか、そういう議論もされていたんですけども、中世以降そういうのがなくなって、精神の病というのは科学的な思考から外れていってしまったんですね。その対象ではなくなっていった。まあ科学自体が振るわなかったのが中世だと思います。

この間、精神の病がどう位置づけられていたかという、エクソシズムというものがありました。『エクソシスト』という映画がありますけども、精神の病は悪魔つきなんだというふうに考えられたんですね。それで、その悪魔払いをするのが精神の病に必要なことだと。

ところが、これは今の考えで言えば、この悪魔払い的な発想というのは、要するに、心の中の表現されていない部分と言うんでしょうかね、心の中の異質な部分というものを実は追い払おうとしているわけですが、その当時はそういう発想がなかったので、悪魔払いという発想になりました。

次に、メスメルという方がいたんですが、この人は催眠術の先駆けみたいな方です。メスメルは、動物磁気という、何か磁気みたいな、そういう謎のエネルギーみたいなものが体の中に出たり入ったりすることで、調子がよくなったり悪くなったりするというようなことを考えました。今思えば珍説だと思えますけれども、そういう説を唱えていたわけですね。それで実際に、そういう治療を行って繁盛して、ぜひそういう治療を受けたいという人

が沢山いたそうです。

ただ、どうもこれというのは、今振り返ってみると、ある種の暗示なんですよね。この磁気を得れば、あなたはよくなります、と。ですから、エクソシズムというのもそうですけど、何かの通りがよくなることによって、エネルギーとか、悪魔の霊とか、そういうものを何となく整えてやることによって、精神がよくなるというような、そういう発想です。

こういうのをメスメリズムと言うんですけども、磁気治療とか、あるいはその前のエクソシズムにも、既に、実はその人間の意識とちょっと違うものがある、そういう発想というのは、ちょっとあったわけですね。ただ、フロイトのように、無意識というふうな言葉も使っておりませんでしたし、そういう体系はなかったわけです。

それで、やや遠回りしておりますけど、シャルコーという人がいて、この方は非常に極めて有名な神経学者なんですけども、神経科医、神経内科医と言ったらいいでしょうかね、フランスの方で、フロイトの師匠に当たる方ですけれども、師匠の1人ですね、この方は催眠術に極めて長けた方で、サルペトリエール病院で、医学的に説明がつかない、当時ヒステリーと言われた、立てませんとか声が出ませんとか、そういう方の治療を催眠術によってしていた方ですね。

ヒステリーというのは女性に起こるんだというふうに当時は思われていました。実はそれは間違いなんです。ヒステリーというのは、神経系の症状が出るんですが、急に意識消失するとか、手足が麻痺するとか、そういうふうな疾患ですけれども、それをシャルコーが催眠という形で治療するということをやってみせるわけですね。

ここへ来て、いわゆる精神の病というものは、単なる動物磁気とか、あるいは悪魔とか、そういうふうなものじゃなくて、もうちょっと医学的な世界で論じられるようになってきたわけです。医学の世界で考えられるように、考え得るものに少しずつなってきたわけです。

それで、フロイトは、これだと、これはいいと思ったようです。このシャ

ルコーの治療論というものに非常に関心を持って、フロイトはもともと神経学者で、いろんな神経細胞の研究をしたりとか、あるいは失語症とか、言葉が出ない病とか、そういうものの勉強をしていたんですけども、開業医になりましたので、だんだんこういうヒステリーと言われる、麻痺したりする患者さんをたくさん診るようになって、その中で、シャルコーの治療方法をとってもいいと考えて、それでヒステリーの治療のほうに関心を移していったわけですね。

それでフロイトがこのときに考えたのは、どうも精神分析、要するに無意識過程というものがあると。無意識過程というものがあるって、欲動、性的な願望とかですね、そういうふうなものを意識から排除するから病気になるんだと。ヒステリーになるんだと。それを抑圧と呼ぼうと考えたんですね。この自我という言葉は、心ぐらいいに思っておいていただいたら結構ですけども。

すなわち、ここで初めて、精神的な病の1つですけどね、ヒステリーというものの、ある種の体系的な説明というものが生まれてきたわけです。すなわち、動物磁気とかでもないし、悪魔がついたわけでもない。そうじゃなくて、何かある種の自分と相入れない観念、アイデアとか、あるいは記憶、そういうものがあって、それを無理やり押し込めてしまって、そうすると、そこにいつまでもくすぶることになるわけですよ。そうすると、無理があり過ぎるので、それで病気になると。

だから、例えばフロイトが言ったのは、禁じられた性愛的な願望を無理やり抑えたので、例えば足が動かなくなるとか、目が見えなくなるとか、そういうことになったということです。そういう方、そんなに沢山はいないんですけども、でも今でもいます、そういう方は。時々病院とかに來られる場合があります、立てなくなりましたとか。やはり今でもヒステリーという方がいて、そういう、何か自分にとって嫌な考えとか記憶というものがあって、それを無意識から無理やり追放しているからそうなるんだ、ということです。今でも精神科医というのはそういう患者さんを診るわけですね。

ここへもってきて、フロイトの考え方はだんだんはっきりしてくるわけですよ。すなわち、意識過程と無意識過程というのがあって、自分はこういう人間であるとか、そういうものと相入れない自分の考えというのが、意識の中で受け入れられないために抑圧されて、無意識の下に葬られて、そうすると無理があるので調子を崩すという、そういう流れになるわけですね。

さて、じゃあ次に、それでは無意識というのはどんな形で表面に浮かんで来るのかということになります。無意識の中に何かが抑え込まれるのはいいとして、もし無意識が心の表面に全然浮かんでこないんだとしたら、無意識がある、と言っても、それだけでは何ともしようもないものになりますよね。だから、無意識が意識の中に少しずつ漏れ出てくるということがあるからこそ、我々はそれを治療に結びつけたりとか、それについて論じることができるようになるわけです。

その1つというのは症状です。最初に言ったように、症状形成という、ちょっと難しい言葉を用いて言ってもいいですけども、この無意識というものの1つのあらわれ方というのは、症状形成です。例えば、さっき言ったように、ヒステリーになるとか、あるいは強迫神経症というものがありますが、そういう形で症状形成するということです。強迫神経症というのは、手を一生懸命洗わないと、何かこの辺にさわってもばい菌がいっぱいついているような感じがするので手を10回洗わないと嫌なんだとか、10分間洗わないといけないとか、あるいは、家を出るときに鍵を必ず5回確認するとか、そういう問題を呈するものですが、そういうものを症状と考えています。

フロイト及びそれ以降の精神分析家たちの考えによれば、今言ったのは強迫症状と言うんですけども、それはある種の不安がもともとどこかにあるんですね。何か罪悪感とか、そういうものを例えばドアノブとかに移しかえて、手を洗うことで代償しようとしていると、そういう理解でもって治療を進めていくのですけれど、そういうのを症状形成と言います。

あるいは、無意識的なものが急にドーンと意識に出てきたらどうなるか。それはパニック発作になるんですね、大体。怒りとか、あるいは性的な刺激

とか、そういうものが何の保護もない状態でワッと出てくると、ものすごくパニック的な不安に陥ることがあります。

あと、次は、錯誤行為というものの中にも出てきます。これは比較的、皆さんも意識したことがあるかもしれないんですけども、例えば、名前が急に出てなくなるとかですね。もちろん名前が出てこない場合には、単なる記憶の問題である場合というのものもあるんですけども、そっちのほうが多いかもしれませんが、よく覚えているはずなのに、それだけ出てこないとかという場合に、強い情緒が絡んでいる場合があります。

あるいは、これはフロイトも言っていることですが、例えばこれから何々の会を終わりますとか、今から始めるのに、間違っ、「会を終わります」と言っちゃったりとか、そういう場合ですが、自分が無意識的に、早くこの会終わればいいとか思っている場合に、もう終わりますと言っちゃうとかですね。逆もそうだと思うんですが、そういうのを錯誤行為とか失錯行為と言います。

あともう一つのルートというのは、夢になります。ほかにも自由連想というのもあって、自由に話してもらおうと、その流れを聞いていると急に話が変わったとか、聞いていても何か機械的な話になっていったりということで、いろいろわかることがあるんですけど、一番わかりやすいのは夢ですね。夢は無意識への王道であるというふうにも言われています。ですから、一番直接的だということですね。

じゃあ夢の分析というのは、実際にどうやっているんですかという疑問があるかもしれませんが、それについてちょっとだけお話しておきたいと思うんですけども、これはセラピーの中で普通に行われているものです。

セラピーって、サイコセラピーとか呼んだりすることもありますけどね、カウンセリングという言葉もサイコセラピーとほとんど同じような言葉で使われています。他にも、心理療法あるいは精神療法と呼ばれたりもします。精神分析というのは、私はそれを専門にしているからですけども、これは週に何回も、最低でも3回、普通は4回か5回位の頻度で行います。今で

は、1回45分から50分位の時間の面接を何年間かやるという、まあとんでもなく労力のかかるプロセスなのですが、フロイトは実はそこまではやってなかったんですね。フロイトの症例というのは半年位で終わっているやつとかもあって、今の分析からすると、多分フロイトの分析は途中で終わっているということになるんですけども。それが精神分析というものです。

精神分析的な心理療法というのは、週に1回とか2回とか来ていただいて、椅子に座っていただいて、話をします。精神分析は、カウチというものをを用いて、半分横になって寝たような感じになってもらいますんで、ちょっと特殊な治療になります。

それで、このセラピーの中でじゃあ実際どうするかというと、夢を覚えていたら夢を教えてくださいと、最初に言うておくんですね。夢を見たら、というふうに言うと、夢を見ないんです、という方もいるんで、それはもう、いや見えていますから、というふうに、こっちから、夢を見ていない人ってまずいないので、大抵覚えてないだけです、ですから、いや見えていますので心配しなくて大丈夫です、と伝えます。夢を覚えていたら教えてくださいとあらかじめ言うと、そうすると、私夢覚えてないんです、という方、結構多いですけどね。ただ、私の経験から、大体ずっと夢を見ない、報告しないということではなくて、大体いっぱい持ってくるようになります。それについて、夢を聞いて、それについて話し合うというようなことをするわけですね。

先ほど言いましたように、本人が気づいていないこと、無意識があらわれていることがあるわけです。症状として出る場合もあれば、夢として、あるいは失錯行為とか、あるいは自由連想の中で夢がわかるわけです。

これはフロイトの写真ですね。葉巻を吸って、これがもとで顎の腫瘍になって、大分つらい晩年を過ごされましたけども、オーストリア生まれのユダヤ人です。『夢解釈』という著作を発表したのが1900年ですね。

ちなみに、フロイトの弟子たちもちょっと紹介しておきます。

このユングは知っている方、多いんじゃないかと思いますね。ユングが極めて有能だったので、フロイトが非常に感心して自分の後継者と思っていた

んですけども、ユングはオリジナリティが非常に高かったので、自分は自分の道を行くと。フロイトの考えに、やっぱり納得がいかなかったんですね。特に性的な欲動というふうなものに納得がいかなくて、ユング派の分析心理学というのを打ち立てて、精神分析とはまたちょっと違う、そういう自分の流派をつくりました。

あと、このメラニー・クラインという女性の方がいるんですけど、この人はフロイトに比較的忠実な方ですね。フロイトの後継の1人と言えます。

さて、ここからいよいよその夢の話をもうちょっとしていきましょう。

古来の夢解釈というのもやっぱりあって、ギルガメッシュ叙事詩というものに出ているらしいんですけども、このときからあったのは、未来を予見するものとしての夢、あるいは神からのメッセージとしての夢というものです。お告げだとか、日本ではありますよね、御先祖様が出てきてこうだとか、まあそういうのはあまりないかもしれないですけども、そういう何か超越的なところからのメッセージだと。大体そういうものは、未来を予見するものになっていることが多いかもしれません。

ただ、フロイトの考えによると、これだと何と言うか、それこそエクソシズムとか、あるいはメスメリズムとかとそんな変わらなくなってしまうたりもしかねないので、それよりももうちょっと合理的に考えようということになりました。だから、未来予見でもないし、神からのメッセージでもなくて、夢として解釈可能なんだとフロイトは考えたんですね。フロイトは科学的に解釈できるんだと。科学といっても、いわゆる今の科学とちょっと違いますけども、もうちょっと理屈の通った形で解釈できるだろうということですね。

フロイトの夢解釈というのはどんなものかといいますと、夢の顕在的内容と潜在的夢内容を区別してみるといいよとフロイトは言っています。

顕在的夢内容というのはどんなものかという、夢にはっきりと描かれているもののことです。例えば波に飲み込まれる夢を見る方がいます。これは比較的よくある夢ですけども、海で波に飲まれるみたいなものです。顕在

の夢内容というのは、波に飲み込まれるということは波に飲み込まれることを意味している、という意味なんですね。それ以上じゃないと。波についての夢なんだというふうに考えるということです。

ところが、潜在的夢内容というのは、夢にははっきりと描かれていないながら暗に示されているもののことです。偽装 disguise されて、要するに違うものになっている部分がある。だから暗に示されているということです。例えば、波に飲み込まれるというのは、母親の情緒、いきなり飛びましたけども、母親の情緒に飲み込まれる、巻き込まれるというふうに考えるわけです。なぜかという、やっぱり海というのは母の性的なものである場合が多いですね。山が父親である場合というのが多いですけども、高くそびえてとかね。海というのは、もっとう、やっぱり生命の、万物の母親みたいなものですから。母親の情緒に巻き込まれる。だから、波に飲み込まれそうで慌ててとか何とか言っている場合は、母親に完全に巻き込まれる恐怖ですね。そんなふうに考えることができるわけです。

そういうふうに考えてみると、夢というのは意外と解釈可能だと。ここで無意識とははっきり言っていませんが、要するに潜在的夢内容というものが無意識で、それが夢工作によって、もうちょっと意識的内容になじむようになったのが顕在的夢内容ですね。ただ、夢というのは、あくまでも意識世界と違うので、顕在的夢内容というのは、まだ無意識のほうに属しているわけですけど、でも、その意識に大分近づいてきたと言えると思いますね。

フロイトはこう言いました。夢というのは願望充足なんだと。だから、何かこうなったらいいなというふうに思ったらそれが満たされる。それが夢の機能なんだと。でも、これは恐らく皆さんも感じたことがあるんじゃないかと思うんですけど、例えば喉が渴いているときに、そのまま寝て、もう水を山のように飲んでいたりとかね。お酒飲んで、何か二日酔いみたいになっていたら特にそうかもしれないですね。ところが、幾ら飲んでも、喉の渴きは癒やされないみたいな。あるいは、トイレに行きたいと思ったら、既にトイレ

に行っている夢を見て、でもなかなか尿意が減らないとか、そういう夢を見たことある方がいるんじゃないかと思えますけども。あるいは、こういうふうになったらいいなと、受かったらいいなと思った試験に受かっている夢とか、そういうのを願望充足と言いますね。

それで、興味深いのは、子供は非常にシンプルな心の持ち主である場合が多いです。ですから、子供の夢というのは比較的シンプルな願望充足の夢としてあらわれる場合がよくあります。

例えばこれはフロイトの例ですけども、日中、食べたかったさくらんぼを叔父さんにあげなければならなかった1歳10か月の男の子の夢です。さくらんぼ食べたいなと思っていたけど、まあ叔父さんにあげなさいみたいな形になってしまった子です。何でこうなったのか不思議なところで、ここにも何かいろいろ物語がありそうですが、それはさておき、その1歳10か月の男の子の夢は、「さくらんぼを全部ひとりで食べてしまった！」という夢でした。おいしかったですよね。そういう夢を報告しているわけです。

さて、次もフロイトの報告した夢です。5歳3か月の男の子がD山の周辺でハイキングをしたが、余り満足していないようだった。新しい山が見えるたびに、「あれがD山？」と聞いていた、というんですね。D山のほうに行きたいんだけど、余りそっちのほうに行けなかったということですね。こういう男の子は、どんな夢を見るのでしょうか。こう思っていると夢はこういうのを見るんです。「僕、D山に登ってきたよ！」と、翌朝夢を報告したというんですね。こういうのは願望充足の極めてわかりやすい例ですよ。

と言われると、ああそうかと、夢は願望充足なんだと、何かすごくわかりやすくなるかもしれないです。

ところが、大人の場合はもっと手が込んでいて、なかなかわからないわけですね。願望充足であることを偽装している場合が多いです。なぜかというと、先ほど言ったように、本当の願望というのは潜在的夢内容で、偽装された内容が顕在的夢内容ですね。偽装する夢の働きというのは夢工作と言いますけども、夢工作なしでそのまま夢を見てしまうと、願望によっては、さく

らんぼを食べたり山に登ったりする位であればいいんですけども、大人の願望というのはもっとどぎついものである場合があります。そうすると、ふわっと起きてしまうというようなことがあるわけですね、悪夢になってしまって。そうすると、そもそも睡眠を維持できなくなってしまうので、巧妙に夢工作をする必要があるわけです。

ある成人男性の夢、これもフロイトのものですが、それをちょっと御紹介しましょう。「二人の人と一緒に（その人達の名前は夢の中では知っていたが、目覚めると忘れてしまっていた）非常に高い鉄の橋を渡っている。突然二人の姿が消えた。見ると、帽子をかぶり、着物を着た幽霊のような男が見える。男性は、その男に、『電報配達人ですか？』と尋ねた。『違う』と言うので、『運転手ですか？』と聞くと、それも『違う』と言った。男はまた歩き続けて行った。」その人達の名前は夢の中では知っていたが、目覚めると忘れてしまっていた、というのは大体ポイントなんですけどね。こういうあやふやになっていたりするのには注意しないとイケないんです。そのあとも、やっぱりさくらんぼや山登りとは全然違いますね。「目覚めた後、夢のことを考えていると、鉄の橋が突然崩れ、墜落するさまが思い浮かんだ」というんですが、これはすごいですね。急にこう、このときのことをちょっと想像してみたらいいと思うんですけど、鉄の橋が崩れたら、まあ恐怖ですよ、そういう墜落恐怖というのがあったんで、こういう夢をどうしたらいいのかということになるわけですけど。

これは、別に墜落したい願望の充足じゃないと思うんですよ。あるいは、電報が欲しかったというんでもないですよ。しかも、電報ですかと聞いて違うと言われてますし。これは一体何なんだろうと。そうすると、この辺ですね、名前がわからないとか二人の姿が突然消えたとか、この辺にポイントがあると考えるわけですね。

名前を忘れてしまった場合というのは、思い出したくないんでしょうね、と考えるわけです。思い出せない、忘れたい人。先ほど失錯行為、錯誤行為というのがありましたけども、人の名前が突然思い出せなくなる。夢の中で

したら、あるいは夢から起きてからでしたら、ぱっと忘れてしまうわけですね。逆に身近な人かもしれない。忘れたい人とは。実はこの男性には二人の兄弟がいたらしいんです。これは今の夢を見ているだけじゃわかりませんが、そうすると、その二人の兄弟の死を願ったんじゃないかという、これって、とんでもなくどぎつい願望ですよ。これをもしその二人の兄弟を刺殺するとか何かそういうどぎつい夢を、高い橋から突き落とす夢を見たら起きてしまうと思います。だから、身近な知らない人が落ちていくんですね。

ところが、じゃあこの鉄橋が墜落するのは何かというと、自分が死にそうなる不安。ですから、罰ですね。そんなことをしたら罰が下るんで、高い橋から墜落するという天罰みたいな、そういうものがあって。

このじゃあ電報配達人は何なんですかという、やっぱり悪い知らせを運ぶ……そういう存在だろうというふうにはフロイトは解釈するわけです。

ここでちょっとまとめますと、フロイトの夢解釈というのは、最初、願望充足系の理解をして、夢工作というものをすることによって、潜在的夢思考が偽装されて顕在的夢思考、夢内容になるということです。

この夢工作でよくあるのが、いっぱいあるんですけども、一つは置き換えです。要するに、兄弟が知らない人になるとか、こういうのを置きかえと言うんですけども、夢の中でよく使われる心の働きです。ですから、例えば自分の父親に対する怒りというのは上司に対する怒りになったりとか、あるいは、母親に飲み込まれそうな恐怖というのは海に飲み込まれる恐怖になったりとかしますね。

あと、圧縮と言うんですけども、いろんな要素が一つにまとまって、物語性は保持しているんだけど、一見意味不明になるように圧縮されるというようなこと。それを解きほぐしていくといいんだとフロイトは論じたわけです。

ここでちょっとさらに、より現代的な話をしたいと思うんですけども、今まで論じたフロイトの夢の理論というのは、心の中に夢があって、こうい

う夢を見ました、という話です。そうすると、精神分析家が、「これはあなた、こういうことですね」というような解釈をして、患者さんが「ああ、なるほど、自分は何か兄弟に対して殺意を持っていたのか」と納得するみたいな話になるわけですね。

ところが、やっぱりそうじゃないんじゃないかということが言われているんです。先ほど挙げたユングも、実は、フロイトが言っていた、偽装としての夢工作というものに、偽装工作として夢工作を考えて解釈していくということに疑問を持っていたわけですね。夢というのは、むしろそうじゃなくて、そのままあらわれていて、例えば海だったら海をそのまま見て、それを煮詰めていったほうがいい解釈になる、というふうにユングは言っていたんですね。

だから、そういうフロイトの理解に対していろんな反論があるわけです。まあ反論が生じるのは、もちろんフロイトが余りにも偉大な面があったので、みんな必死になって反論するわけですよ。それが意味で精神分析の歴史なんですからね。

1つの論点というのは、夢って完成したように言っているけども本当なんですか、というものでした。だって本当の夢なんて世の中になんないじゃないですか、という反論があったんですね。人類始まって以来、夢がそのまま再現されたことは1回もありません。夢の報告はあるんです。起きた直後であっても、それは報告なんですね。あるいは、夢のイメージを絵に描くこともできるかもしれない。何らかのイメージとして映像にすることはできるかもしれない。においを加えることはできるかもしれない。でも、夢自体というのは、そのときは現在進行形で起こっているんですよ、夢を見ているときは。だけど、夢は、見た、としか言えないんです。

皆さん、夢を見ているという体験を起きている間にしたことのある方はいないですね。夢について話しているときって、もう起きているんで、必ず過去形になっているわけですね。これ、私は最初に聞いたとき、なるほどと思っただけなんですけどね。

だから、夢テキストを夢見る人というのは存在しない。夢テキストというのは、必ず後からそうなっているということなので、ということは、我々ができるのは夢体験そのものを分析することじゃないわけなんです。夢体験そのものというのは分析不能なんです。ですから、夢体験そのものじゃなくて、その変形されたものについて話し合うことしかできないですし、それが夢分析であって、夢の本質でもあるという。

そうすると、ここに2次加工という概念があります。夢そのものの中だけじゃなくて、夢がほぼ完成に近づいている、あるいは起きた後で、どっちもあるんですけども、つじつまが合うように、もっと話を補完するような加工のことを2次加工と言います。これはフロイトも気づいていました。

ただ、フロイトは、何かこの辺、はっきりそれがいつなされるのかということについて、はっきり言っていませんでした。夢の中で完結すると言っているときもあれば、夢が終わった後に思い出すときに起こるとも言っています。

ここでは夢の2次加工の中でも、想起して語られるたびごとの2次加工というものを考えてみましょう。起きた後に、語る夢テキストというのは、滑らかにされたりとか、変更されたりする。誇張されるとか、わかりやすくなる。

そうすると、この変化した部分というのが特に重要な領域だとなるわけです。

ですから、ここに新たに出てきた考え方というのは、夢というのは解明されるべく心の中に埋まっているんじゃないで、何かのメッセージで、それを聞くことで、その人の心というものにより近づくと。要するに対話なんだと、夢自体がね。コミュニケーションだというような考え方が出てきたわけです。

じゃあこの2次加工の例を挙げてみたいと思います。

これはブレッシュナーという人の本（Blechner, 2001: the Dream Frontier. 邦訳『夢のフロンティア』）からとったものですが、聖書の創世記か

ら、ちょっと恐れ多いんですけど、頑張ってみてみたいと思います。邦訳ではブレッシュナーの本から訳していますが、ここでは新共同訳からとってきています。ファラオの夢、ヨセフがエジプトで奴隷時代に夢解釈をして抜擢されるということがあって、そのときの夢です。

最初にファラオはこういう夢を見たと言っています。しかし次に今度はヨセフに、こういう夢を見たんだけど、と言ったときには、実は少し違っているんですね。最初の夢の報告と次の夢の報告でどこが違うかと、ちょっとだけ違うんですけども、ちょっと読みます。「二年の後、ファラオは夢を見た。ナイル川のほとりに立っていると、突然、つややかな、よく肥えた七頭の雌牛が川から上がってきて、葦辺で草を食べ始めた。すると、その後から、今度は醜い、やせ細った七頭の雌牛が川から上がってきて、岸辺にいる雌牛のそばに立った。そして、醜い、やせ細った雌牛が、つややかな、よく肥えた七頭の雌牛を食い尽くした。ファラオは、そこで目が覚めた。」ファラオが最初見たときには、こういうふうにしたという事なんです。

次に語る時には、ちょっと後に出てくるんですけど、「あれほどひどいのは、エジプトでは見たことがない」とつけ加えられているんですね。同じように、最後の方に、「ところが、確かに腹の中に入れてのに、最初と同じように醜いままなのだ」とも付け加えられているんです。最初は、こういうのではないわけですよ。だから、この部分というのは、ファラオが自分で入れたところなんですね。

とすると、これも実際本当にそうなのか、もう今となっては、見たままなのかどうなのかと問うてもしょうがないわけなんです。見たままというのは、そういうものはないということですね。

それよりも大切なのは、こういうふう語るたびに、ほぼ同じなのに語りが変わっている。ここに何か、ファラオ自身の心の無意識的な動きがあるんじゃないかと考えることができるわけです。

次の夢も同じなんです。「ファラオがまた眠ると、再び夢を見た。今度は、太って、よく実った七つの穂が、一本の茎から出てきた。すると、その後か

ら、実が入っていない、東風で干からびた七つの穂が生えてきて、実の入っていない穂が、太って、実の入った七つの穂のみ込んでしまった。ファラオはそこで目が覚めた。それは夢であった。」

今度は実の入った穂、実の入っていない穂、これも同じなんですけどね。牛が穂に変わったんですが、次に語るときにはやっぱり「やせ細り」と付け加えられているんです。そのやせ細っている感覚というものに、ファラオが無意識的にすごく反応しているということが、ここで言えるわけです。

そうすると、このヨセフ、現代風に夢解釈すると、ヨセフはそんなふうには思っておりませんでしたけども、神からのお告げだと考えていましたけども、夢解釈するとしたら、ここの「やせ細り」というところとか、あるいは、この「あれほどひどいのは見たことがない」とか、あるいは、時系列になっているのに、太っているのを食べたら太るはずなのに、そうならなかったというところにポイントがあると考えられるわけです。ファラオが無意識的に思っているというように、そういうふうを考えることができるわけです。

そうすると、このヨセフの夢解釈というものが出てきた理由というものをおぼえては考えることができるということですね。ヨセフは、「ファラオの夢は一つでございます」と、どちらも同じ意味だと言います。さらに、「神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです」と続けます。ここはいわゆるギルガメッシュ叙事詩的な発想で、神からのお告げだということですけども、要するに、七年というのは豊作の七年で、最初の太った、あるいは実の入った七年というのは豊作で、その後のやせた、あるいは実の入っていない七年というのは凶作なんだということですね。飢饉が来る、だから備えよ、という、そういう意味です。

ここでヨセフが使っていたかもしれないのは、ファラオの無意識的な心の動きですね。すなわち時系列でいったら太っているはずなのに、そうならないということは、何かが問題だと。エジプトが今まで見たことのないひどい事態なんだという強調があったので、そこに何か不安というものを表しているのかもしれないわけです。ファラオは暗に何かそう思っていたの

かもしれないですね。これはプレッシュナーという人が書いていることです。それをとってきました。

そうすると、夢分析には二つの側面があるということが分かってきます。夢のいろんな機能というものについて、いろんな人がいろんなことを言っているんですが、フロイトはそれは願望の充足だと言っていて、ユングは意識的生活の補足あるいは補償だと、ですから、受け入れられないとかではなくて、意識的生活に欠けているものを補うんだと言っていたわけですね。

他には、夢以外では伝えることのできないことの伝達、新しい意味の創造、言葉にならない思考の構成などの機能が夢にはあると言われています。こうやって考えていくと、実は夢の分析には二つの側面があって、一つは、心の中に埋め込まれているものを解読するという面であって、もう一つの側面というのは、実はそういうふうに夢を持ってくることで、夢見手が自分自身も知らない面を治療者に知ってもらおうと、あるいは治療者と一緒に発見していこうと、そういう面なんだということです。それが二つの側面ということですね。

ですから、夢の内容という面と、夢を相手に話すという、話したいという側面、これ、フェレンツィという人、この人はフロイトのすごいお気に入りの弟子で、でもそのうちフロイトの気にさわるような論文を発表して追放されてしまい、そのうちに亡くなってしまったというかわいそうな方なんですけど、すごい天才的な方なんですけど、このフェレンツィという人は、夢というのは、伝えなくなった相手に関するものだというふうなことを言っています。だから皆さん、今度、こんな夢見たよと誰かに言いたくなったら、その人に何か言いたいことがあるのかもしれないということです。いつもそうだとはいわないですが、そういうことをフェレンツィは言っていました。

あと、ホブソンとマッカーリーという人たちがいて、この方たちは研究者で、フロイトの論敵です。もちろん時代は全然違って現代の方たちですけれども、彼らは、夢は周期的な脳の発火の附帯現象、エピフェノメノンだと言いました。夢は脳の発火現象にたまたまくっついてしまったものだというふ

うに言っているんですけども、要するにこれはどういうことかという、夢の意味はないですよというような仮説なんです。そういうことを言っている人もいます。

これはすごくセンセーショナルで、一時期、広く流れました。夢分析、それは偶然、たまたまですということなんですね。どういうことかという、ホブソンとマッカーリーが言っていたのは、脳の一部というのが、周期的に、発火と言うんですけど、神経というのは電気的な信号なので、パルスとって興奮するんですね。寝ている間でも神経の高ぶりというものがどうしても必要な、それが脳の深部、脳幹というところから勝手に生じてしまうんですと。

脳幹のあたりから、勝手に刺激が上がってきってしまうのであって、それに、せっかく刺激が上がってきたので何か色でもつけないとうまくいかないからというように色をつけたのが物語なんだと。だから夢自体には意味がないんだと言っている人たちなんです。

だからここの脳幹で夢が形成されるんだというふうにホブソンは言ったんですけども、ただ、ソームズという人がいて、この人は精神分析と脳科学を両方専門にしているような方で、精神分析の味方の方で、フロイト全集の新訳を完成させた方でもあるんですけど、この人が研究しました。すると脳幹を損傷しても夢を見る人がいる。だから、脳幹のランダムな刺激で夢が形成されているわけじゃない。損傷すると夢を見なくなるのはむしろ大脳の一部で、大脳の一部の中に、頭の前の方の内側の方、そこを損傷すると夢を見なくなるのであって、だから、この脳幹からのランダムなサインによって見ているというんじゃないんだと言うんですね。

あとは、ソームズが言っているのは、夢の始まりはランダムかもしれないけれども、そこから後というのは違うんだということです。特にドーパミンという神経伝達物質、脳の中の化学物質があるんですけども、これは快とか欲望に関する神経伝達物質なんですね。どうもそのドーパミンが夢を生み出すらしいと言うんですよ。ということは、やっぱりフロイトが言っているよ

うに欲動が夢に関係しているかもしれない。そうすると、何かフロイトも、脳科学で見ても、かなりいい線行っているんじゃないかというような話になっているわけです。

というように、夢という現象を巡ってさまざまな意見、考え方があってということがおわかりいただけたかと思います。

ブレッシュナーという人の新しい創造としての夢という考え方をちょっと御紹介したいと思うんですけども、例えば既に意味の決まったもの、例えば幼児的願望を何とかして実現しようとするための夢、そういうのはフロイトの考えですね。フロイトによれば、夢がビザールである、奇妙であるということは、不快な潜在内容を偽装するためです。これが例えば、前にお話しした、突然二人の男がいなくなって、鉄橋から墜落するって、これビザールですよ、奇妙ですね。それは、不快な潜在内容、すなわち兄弟に対する殺意とか、そういうものがあるから、偽装してそうなんだという、それがフロイト的な考え方です。

ただし、そうじゃなくて、むしろ人間によってランダムに、ある意味でこれは、さっきのホブソンとマッカーリーの考え方とかなり近いところがあるんですけども、確かにランダムに生産されてしまっている面もないわけじゃないかもしれない、それが脳幹によってなのか大脳の一部によってなのかは別として。だけど、それを創造的に用いるのが大切じゃないですかとブレッシュナーは言っているんです。

それでブレッシュナーは、ちょっと大げさなんですけど、「夢のダーウィニズム」という言葉を持ち出してきて、夢ってランダムに生成されてしまうけども、そういうのも含めて創造的に使っていくことというのが実は人間をより豊かにしているんじゃないかということを行っています。これとかは、やっぱり特にクリエイティブな仕事、それこそ芸術、音楽、絵画とか、そういうふうな、あるいは作家さんとか、そういう仕事に携わる方々にとってすごく大切だと思います。ということで、夢というのは、むしろ拡張、創造のプロセスなのではないかという考え方があります。非常におもしろい考え方

だと思えます。

もう一つ、解離と夢についてお話ししたいと思います。ちょっとかたい言葉ですが、解離というのは、意識の変容状態のことなんですけど、言ってみれば、自分じゃない自分みたいな、そういう感じになる状態のことを言います。これは臨床的には、離人症とか現実感の喪失として現れます。現実感の喪失というのは、何かここにいない気がするみたいな感じのことです。

夢のもう一つ、フロイト的ではない考え方というのは、こういう解離現象、日常的解離現象として夢を考えるとという方法です。ですから、もう一人の自分のような存在がいて、そういう人が違う世界を夢見ているという考え方です。ただ、これって今までお話した話と、フロイトとも若干つながるところがありますね。フロイト以降の話とはもっとつながると思うんですけども。

ブロンバーグという人がいますけども、この方がこんなことを言っています。「患者が夢を持って来るとき、分析的な課題は、患者が夢見手を連れて来ることができるようにすることである」と。これは、特に大学院生の方とか、今日も来ていただいていますけど、よく覚えておいて欲しいんですけども、要するに、患者さんが夢を持ってきたら、もちろん夢見手はそこにいるわけですよ、患者さんとして。だけでも、やっぱりある意味では、まだ夢としてしか自分を表現できてないということなんですよね。だから、夢そのものもいいんだけど、夢の世界にいるような人として、こっちに来てほしい。先ほどのフロイトの例で言えば、こういう発想はフロイトはしていなかったんですけども、例えば、兄弟に対する殺意を持っている、激しく怒っている人としてここに来て欲しいわけです。なぜかという、それがその方の大切な部分の一つだからなんです。全部じゃないですけど。

同じように、ブロンバーグはこういうふうにも言っています。「夢は、日常において最もありきたりな心の解離的活動として考えることができるかもしれない」と。

あるいは、タウバーとグリーンという人は、「閾値下の知覚が、意識状態の中に様々に潜んでおり、それが、夢という場に現れて出て来る」と言って

いますけど、要するに、これもまた同じようなことです。意識というのはいろんな層があって、今ここで思っているのと別人みたいなところがあって、我々にとって大切なのは自分の知られていない面ですね、そういうものに触れることが重要なんだと言っているわけです。

ということで、夢とは、いまだそこにあることを許されていない意味が到来する機会なんだということです。だから、もう既にある意味を解説することじゃなくて、自分自身に許せてないような、誰にも伝えられていないような、そういう自分を到来させるためのものであって、それを話すことによって、誰かとつながることによって自分に許すと。微妙にフロイトの考えと実は似ているんですけどね。ある意味で、夢の分析というよりは拡張のプロセスだと考えた方がいいのではないかという考え方もあります。精神分析だと考えるのはやめて、精神拡張だと考えた方がいいんじゃないかという考え方もできます。分析して、あなたの心はこうなっています、というよりは、自分の体験できることが増えていくことが重要だということですね。

最近の考え方の一つは、ですから、精神分析というのは終わりのない作業であって、自分というものには、まだ全然体験できていない面がいっぱいある。だから、体験することというのはいいことなんだという考え方です。もう既にあってそこに向かって広がっていくのではなくて、ないところにも広がっていくんだと。そういう考え方がより中心になってきています。ということで、なかなか遠回りもしましたけども、最後に夢見手と出会うということがどのようなことなのかということについて、ゴールにたどり着くことができたんじゃないかなと思っています。

ということで、これ位で今日はお話を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

文献

- Blechner, M. J. 2001 *The Dream Frontier*. The Analytic Press. (鈴木健一 監訳・小池哲子 訳 2018 『夢のフロンティア』 ナカニシヤ出版)
- Bromberg, P. M. 2011 *The Shadow of the Tsunami: And the Growth of the Relational Mind*. Routledge. (吾妻壮・岸本寛史・山愛美 訳 2014 『関係するところ―外傷、癒し、成長の交わる場所』 誠信書房)
- Freud, S. 1900 Die Traumdeutung. Gesammelte Werke: II/III. (新宮一成 訳 2007 夢解釈 1, 2. フロイト全集 4, 5. 岩波書店)
- Freud, S. 1915 Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. Gesammelte Werke: XI. (鷺田清一 訳 2012 精神分析入門講義. フロイト全集15. 岩波書店)
- 聖書 新共同訳 2001 日本聖書協会